

学会ニュース

.....・第106号 2026年5月

目次

・ 学会費納入のお願い	 1
・ SMOOSY導入のご案内	 1
・ 第48回大会について（大塚 雄太）	 3
・ 一橋事務局右往左往の記（小関 武史）	 3
・ シンポジウム報告（大野 芳材）	 5
・ 事務局より	 7

学会費納入のお願い

本学会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までです。学会の活動は、会員の皆さまからの年会費によって支えられています。過年度分の年会費が未納の方は、SMOOSYのマイページからお支払いをお願いいたします。未払い分がある場合には、後日学会からもご請求のご連絡を差し上げます。

2026年度分の会費納入につきましては、6月中にあらためてご案内申し上げます。

SMOOSY利用方法と年会費納入方法について、以下あらためてご案内します。

SMOOSY導入のご案内

当学会では、学会運営を簡素化・効率化し、学会を長期的に維持するため、2023年度から、株式会社アトラスが提供する会員管理システムSMOOSYを導入しております。

会員の皆様には各自「会員マイページ」が割り当てられており、各自の操作によって、以下の一連の操作が可能です。

- ・ 会員登録情報の閲覧、変更
- ・ 会費納付状況の照会
- ・ 会費のオンライン決済手続き（銀行バンクチェック決済）
- ・ 会費の請求書、領収書PDFのダウンロード
- ・ 学会からのお知らせ閲覧

また、学会からの連絡や会費納入の督促もSMOOSYを通じて一括して行うことになります。以下では、①会員マイページにログインし、登録情報を更新する方法、および②オンライン上で年会費の支払いを行う方法を再掲します。

①【会員マイページ ログイン方法】

(1) 会員マイページの「初めてログインする方はこちら」をクリックし、会員情報として登録しているメールアドレス（※）を入力して「送信」ボタンをクリックします。

- (2) 「パスワード設定URLのお知らせ」メールが届くので、メール文内のパスワード設定URLをクリックします。
- (3) パスワードを入力し「登録」ボタンをクリックします。
- (4) 「会員マイページ」ボタンをクリックして会員マイページを表示します。
- (5) 画面一番下の「会員情報を変更する」ボタンをクリックし、ご自身の情報を確認・更新してください。

※登録されているメールアドレスは、当学会から会員の皆様にお送りしているメールの受信アドレスとなります。メールが届いていない方は事務局（jsecs18@gmail.com）までご連絡ください。

また、操作方法が不明な場合は会員マイページ画面右上の「ヘルプ」をご参照ください。さらに、一部の項目については、会員による変更ができません。会員種別、氏名、生年月日、入会日（不明者は1800年に設定）等です。これらについて変更を希望される方は、事務局までお知らせください。なお、賛助会員の方はマイページがご使用になれません。内容のご照会は引き続き事務局までお願いいたします。

②【年会費の支払い方法】

- (1) まず会員マイページにログインしてください（①参照）。
- (2) 画面上で「請求名称・入金状況」を確認してください。「未入金」と表示される年度の会費の納入をお願いします。
- (3) SMOOSYでの決済は、SMOOSYを運営する株式会社アトラスを通じて、株式会社ROBOT PAYMENT（ロボットペイメント）の決済代行サービス（バンクチェック）を利用しています（※）。
- (4) 「請求/入金情報」欄の画面右側「操作」枠の「支払う」をクリックし、
- (5) 明細を確認の上、「お支払いに進む」をクリックしてください。
- (6) 受付画面（ROBOT PAYMENTシステム）で電話番号と振込人名義を入力します（SMOOSY上で電話番号が登録されている場合は、あらかじめ表示された電話番号のままで結構です）。振込人名義欄にはSMOOSYに登録されている氏名のカナ表記が表示されていますが、お持ちの口座の名義と異なる場合は口座の名義と一致するように変更してください。一致しないとROBOT PAYMENTシステム上で入金を確認できません。
- (7) 「入力確認」画面で入力事項を確認の上、「次に進む」をクリックし、「決済申し込み完了」画面で「決済申し込み」をクリックします。
- (8) ここで、いったん会員マイページに戻ります。「請求/入金情報」欄の右側に、あらたに「振込先口座情報」のボタンが現れるので、クリックしてください。
- (9) 振込先口座番号の情報が現れます。以下はその一例です。各会員の振込毎に、「りそな銀行アース支店」の「ロボットペイメントシュウノウダイコウ」名義の個別の振込先口座番号が指定される設定となっています。この口座番号は一請求につき一つずつ割り当てられるもので、同一会員であっても年度ごとに異なります。複数年度の会費が未納の方は、お手数ですがそれぞれの請求に対応した口座に入金してください。

例)

0010.りそな銀行	936.アース支店	普通.76****3.カ)ロボットペイメント シュウノウダイコウ
------------	-----------	----------------------------------

- (10) 受付メールが届きます。振込先口座番号はメールにも記載されています。
- (11) 指定された振込先口座番号への入金、従来のゆうちょ銀行口座への入金方法とまったく同じです。会員各自がオンライン決済なり、銀行での振込なりによって実行してください。
- (12) ROBOT PAYMENTで入金が確認され次第、SMOOSYからメールで銀行振込の確認のメールが届きます（数時間、ないし土日を含む場合は数日かかる場合があります）。なお、学会事務局には

ROBOT PAYMENTから入金確認後、その都度通知が入ります。

(13) 同時に、SMOOSYの会員マイページ上で「請求/入金情報」欄の該当年度の右端に「領収書を発行する」のボタンが現れます。

(14) 請求書を発行する場合は、「請求/入金情報」欄の画面右側「操作」枠の「請求書を発行する」からダウンロードしてください。

(15) 領収書を発行する場合は、お支払い後、「請求/入金情報」欄の「入金済を含む全ての請求を表示する」をクリックし、「請求一覧」画面右側「操作」枠の「領収書を発行する」からダウンロードしてください。

※年会費の支払いは、事務局の負担の軽減のため、できるだけROBOT PAYMENTを介した入金をお願いします（一請求一口座の効果で、誰がどの年度の会費を払ったかが自動的に記録されます）。従来通り、学会のゆうちょ銀行口座への直接振込を希望される方は、学会事務局まで申し出てください。

学会運営の効率化と維持のため、以上、①登録情報の確認と②年会費の納入につき、会員各位のお力添えをお願いいたします。

以上、ご不明な点があれば、日本18世紀学会事務局（jsecs18@gmail.com）までお問い合わせください。

第48回大会について

大塚 雄太

第48回大会は、2026年6月27日（土）・28日（日）に関西学院大学（西宮上ヶ原キャンパス）で開催します。昨年度を上回る19件もの自由論題発表の申し込みがあり、たいへん充実したプログラムとなりました。

27日には、レクチャーコンサート「18世紀の舞踏譜にみる空間と身体」が、関西学院大学文学部美学芸術学研究室との共催で行われます。木村遥会員と貝田かなえ氏によるレクチャーとともに、樋口裕子氏、有門奈緒子氏によるバロック・ダンス、大内山薫氏によるバロック・ヴァイオリンの演奏が披露されます。開催校のご尽力により、こちらも充実した企画となっております。皆様、ふるってご参加ください。終了後には、Peatixによる事前申し込み制で懇親会も開催されます。

28日午後には、上村剛会員をコーディネーターとする共通論題「複数形のアメリカ——合衆国独立宣言250年を超えて」が設定されています。菅原百合絵会員の司会により、上村剛、安村直己（オンライン参加）、王寺賢太、中井亜佐子各氏から御発表をいただきます。

大会プログラム詳細、懇親会申し込みなどについては、学会HPの「次回の大会」に掲載されています。レジュメ集の印刷配布はありませんので、必要に応じてダウンロード、印刷してご持参ください。また、学会参加のため託児サービスの利用が必要な方は、事前に学会事務局に御連絡いただき、各自お申し込みの上、後日領収書を学会事務局に送付してください。引き換えに費用の半額を学会で負担いたします。

なお、本大会は関西学院大学の後援を受けています。関係各位に記して感謝申し上げます。

一橋事務局右往左往の記

小関 武史

2019年6月から2023年6月までの4年間、日本18世紀学会の事務局は一橋大学に置かれており、私は事務局長として学会の運営に携わった。振り返ってみれば、学会運営のあり方はその間に大きく変化

した。会員管理システムSMOOSYの導入は事務局が一橋を離れた後のことだが、それは一橋時代に生じた変化の帰結である。会員のみなさんにとっては便利な面と不便な面の両方があるだろうが、なぜSMOOSYのような仕組みを取り入れる必要があったかをご理解いただくためにも、旧体制下における事務局業務がどのようなものであったか、その一端を記録にとどめておくことには意味があるだろう。

はじめは『啓蒙思想の百科事典』の第一回編集会議の日だった。2019年2月、東京・神保町の丸善出版の会議室に、大勢の日本18世紀学会会員が『事典』の編集委員として集まっていた。各委員は数人ずつの班に分かれて意見を出し合っていた。それなりの時間が経ち、みなが適宜休憩を取り始める。ふと顔を上げると、壁際に立っている長尾伸一先生がにこにこしながら私を手招きしている。傍らには小田部胤久先生が柔和な笑みをたたえて佇んでいる。小田部先生は当時の代表幹事、長尾先生はその前任者だ。私は何の疑いも持たずに、お二人のもとに向かった。そこで私を待ち受けていたのは、「次の学会事務局を引き受けてほしい」という依頼だった。予想外の展開に私はうろたえたが、すでに道筋はつけられていた。こうして、逸見龍生代表幹事のもとで一橋大学に事務局を置き、私が実務を取り仕切る体制が発足したのだった。

しばらくはマニュアルと首っ引きで業務をこなし、疑問が生じたら前任者に問い合わせで教えを請い、何とかやり過ごしていた。ある程度慣れてくると、事務局業務の核心は名簿と会計であることが分かってきた。もちろん、学会の存在意義からすると大会の開催と『年報』の発行が重要なのだが、それらを支える土台は名簿と会計である。どの会員が何年度分までの会費を納入しているかを正確に把握していなければ、会費を請求することすらできない。

私が事務局を引き継いだとき、名簿管理はFileMaker Proというソフトで行われていたのに対して、会費納入状況はExcelにまとめられていた。ここが連動していなかったのが、第一の難点である。会費は学会が保有するゆうちょ銀行の振替口座に振り込まれるが、そのお金の動きを手入力でExcelのファイルに転写しなければならない。第二の難点である。（以前は払込票が封筒に入った状態で勤務先に郵送されていた。同じ時期に別の学会で事務局を担当している同僚がいたものだから、たまに誤配があったりする。「うちの伝票がない!」とか「なんだ、このよその学会の伝票は?」と大騒ぎになったこともある。この問題はゆうちょダイレクトに申し込むことによって払込票がPDFファイルとして閲覧可能になり、やっと解消された。）

問題が以上の二つにとどまっていれば、破綻は免れていたかもしれない。決定的な打撃となったのは、会員種別の導入だった。一体、どういうことか?

現在、学会にはA会員とB会員の種別があり、会費の額が異なる。この制度が承認されたのは2019年6月の第41回大会総会においてであり、導入は2020年度からであった(学会ニュース第91号を参照)。趣旨は次世代支援のためであり、学生や常勤職を持たない会員の経済的負担を軽減することを目的としている。学会にとって適切な措置だったと思うが、これが会費請求業務に支障を来すとは誰も予期していなかった。

会員種別の導入前は、会費は一律5000円だった(賛助会員を除く)。会費請求に際しては、滞納期間の有無に注意を払うだけでよかった。滞納がなければ当該年度の5000円、1年の滞納があれば2年分として10000円を請求する。請求額が15000円や20000円というケースもなくはないが、いずれにせよ5000の倍数だ。事務局としては、あらかじめ口座番号と金額を印字した払込取扱票を用意しておき、納入状況に合わせて会員宛の郵送物に同封すれば済む(さらっと書いているが、これはこれで結構面倒な作業である)。会員にとっても、自分が支払うべき金額で迷うことはない。

ところが、会員によって会費の額が異なると、個々の会員に対する請求額もバラバラになる。しかも制度導入直後は「会員の種別は自己申告」という扱いにしたので、誰にいくら請求するのが適切なのか、事務局では判断がつかない。「この会員は常勤職に就いていて、滞納がないので請求額は6000円」というような分かりやすいケースばかりではない。「2019年度の滞納1年5000円+2020年度のA会員会費6000円で合計11000円」とか、「2020年度に従来通りの5000円を納入したA会員に対して、不

足分の1000円を上乗せして2021年度には7000円を請求」とか、いろいろなケースが発生する。払込取扱票には口座番号だけを印字し、金額は空欄にするしかない。あるいは払込取扱票の封入そのものを断念することになる。すると、会員のほうでもいくら払うべきかが分からなくなり、支払額を勘違いしたり、後回しにしたまま支払を忘れたりする。仕方のないことだ。そして、混乱は時とともに拡大する。新制度導入から2年、3年と進むにつれ、上に例示したものよりはるかに複雑なケースが膨れ上がる（「就職したのでB会員からA会員になったがB会員としての額しか払っておらず、しかもそれ以前の留学中に1年分の滞納があつて……」等々）。ついには、会費収入が期待値の半分ほどに減ってしまった。このままでは学会の財政が破綻するのは明らかだった。

私も手をこまねいていたわけではない。対策を打とうと頑張ってみた。会員は会費を踏み倒そうとしているのではない。支払額が分からなくなっているだけだ。ならば、それをお知らせしよう。会費の支払状況が不規則になっている会員に対して、私はExcelで管理している台帳をもとにして払込日・金額・会費対象年度を表にした文書を作成し、今回の請求での支払金額を計算して示した（場合によっては支払超過となっているため支払不要である旨を伝えた）。2021年5月には、この通知文書を11名の会員に対して封入している。しかし、それが限界だった。計算はますます複雑になる一方で、もはや独力では対処しきれない。抜本的な解決策が必要だった。

目指す方向は明白だ。会員の名簿情報と会計情報を連動させること。そして会員自身がそれらを確認できるようにすること。さらに事務局の会計処理を簡素化すること。要するに、私が手作業で行っていたことを自動的に処理する仕組みが必要なのだ。この目的を達成するための最適解は、ウェブ上に会員管理システムを構築することである。こうして導入されたのがSMOOSYである。マイページにログインすれば、各会員は自身の「会員情報」と「請求/入金情報」を確認することができる。後者については過去の請求一覧も参照可能で、そこには上記のExcel台帳の記録が反映されている。事務局にとっても、利便性は向上した。手作業は激減し、有職故実に通じていなくても処理が可能になった。

一橋に事務局が置かれている間にSMOOSYの運用開始に漕ぎ着けられればよかったのだが、問題の本質を見極め、方向性を打ち出したところで時間切れとなった。幸いなことに、次の王寺賢太代表幹事体制のもとで事務局が強化され、チームとして対応に当たることができた。私としてはそこまで見届けたうえで学会の運営から身を引きたいと思っていたので、肩の荷が下りた気がする。

事務局は縁の下で力持ちであって、その存在は目立たないほうがよい。何か問題が発生すると、事務局は忙しくなる。謝ったり、お願いしたり、神経がすり減る。事務局長在任中、私のパソコンには変な癖がついていた。ローマ字入力でMとOのキーを打っただけで「申し訳ありません」という文字列が変換候補として表示される有様だった。今はもう、そんな不健康な状態からは脱した。幹事を退任して約一年、おかげさまで本業の研究にも身が入るようになった。自分が何もしなくても、所属する学会の運営が回っている。こんなにありがたいことはない。今後もこの学会がサロンのように居心地のよい場であり続けるために、一会員として力を尽くしたい。まずは2026年度の会費を払わなきゃ。

事務局が今日も平穏無事でありますように。

シンポジウム報告

大野 芳材

2025年11月30日、初冬の晴れた日曜日、日本18世紀学会と東京富士美術館の共同開催、日仏美術学会の後援で、「ルネ・ユイグの世界 ふたつの視座から」と題したシンポジウムが、八王子の同館のミュージアムシアターで開催された。美術館では特別展「ヨーロッパ絵画 美の400年」が開かれており、それに連動した企画である。年末のせわしない時期ながら、研究者と非会員合わせて80名ほどが参加した。

東京富士美術館は絵画、彫刻、写真、版画、工芸作品など西洋と日本の充実した美術作品の蒐集で知られているが、わけても18世紀西洋美術は日本で屈指の質の高さを誇る。研究者にとっては展示されている作品をテーマに語ることができる得難い機会であり、美術館にとっては所蔵作品についての最新の研究成果に接することによって、新しい企画や展示の工夫の手がかりになるだろう。それぞれのこうした期待から、今回の企画となったのである。

さて、ルネ・ユイグ (René Huyghe, 1906-1997) である。20代初めにルーヴル美術館で働き始めて1930年に学芸員補佐となり、学芸員を経て絵画部長として第二次世界大戦中には作品を地方に移送して、ナチス・ドイツの収奪から守った。1950年にはコレージュ・ド・フランスに新設される「造型芸術心理学」の教授となり、ユイグ独自の視点からの研究を深めた。それは図像や形態という美術史通例の枠組みを越えて、「芸術家の精神 (ユイグはしばしば内的生命と呼ぶ) に働きかけ、かれを何らかの方向に導く諸原因を突き止める」ことを目指すものであった。強靱な頭脳と驚嘆すべき視覚の記憶力で、先史時代から現代まで研究が推進された。視線は宗教にも向かい、仏教にも深い関心をもった。それが機縁となって、東京富士美術館の開館記念の展覧会の監修などを引き受けて、名誉館長に就任したのである。ユイグ歿後には、手稿原稿や講義ノートや日記など貴重な資料が大量に美術館に寄贈されて、今それらは整理の途上にある。かくして美術研究者にも美術館にもゆかりのあるユイグを基軸に、シンポジウムが開催されたのである。

シンポジウムは、ユイグの美術館人としての活動に焦点を当てた第一部と、美術研究者としての側面から東京富士美術館が所蔵する18世紀絵画を取り上げた第二部からなる。

東京富士美術館の清水由朗館長の、共同開催となるシンポジウムへの期待を込めた開会のあいさつに続いて、同館の前館長五木田聡氏による「ルネ・ユイグと東京富士美術館」と題した発表で第一部が始まった。五木田氏はユイグと直接交渉をし、開館3周年記念展「栄光の18世紀フランス名画展」をはじめとするユイグが監修した展覧会を担当するなど、ユイグを最も身近で知るひとりである。発表では、ユイグの略歴、ルーヴル美術館の改革、造型芸術心理学、戦時中のナチスとの闘い、東京富士美術館との交流、寄贈資料など9つの項目が、多くの写真資料とともに明晰かつ具体的に示された。

松岡智子氏 (倉敷芸術科学大学) は東京富士美術館の草創期に学芸員を務め、その後、大学に転じられた。パリ留学時代にユイグと話す機会があったとのことである。まず1983年の同館の開館記念展「近世フランス美術展」にふれて、そこでのユイグの貢献が語られる。作品の選定、8館に及ぶ作品所蔵先との出品交渉、カタログ執筆でユイグが中心的役割を果たしたこと、とりわけ作品の展示については、鑑賞者と作品の「対話」というかれのミュゼオグラフィーの重要な事例という、ユイグの美術館人としての本質をついた指摘がある。さらにナチス・ドイツから作品を守るための知る人の少ない活動が、ユイグの寄贈資料にある文書記録や写真をもとに解明された。

休憩をはさんで、作品を中心にした発表に移った。

まず私が第二部の導入として、美術館が所蔵するジャン＝アントワーヌ・ヴァトーの《アントワーヌ・ド・ラ・ロックの肖像》を手がかりに、ユイグの論考「ヴァトーの世界」(1950年)を参照して、「造型芸術心理学」の説明をした。作品は頭部のみがヴァトーの手になるものだが、わが国唯一のヴァトーの作品として、きわめて貴重である。ユイグは前記の内的生命に接近する手だてとして、歴史や社会や時代など画家を取り巻く「外的世界」の解明を重視する。が、研究の核は作品であり、画家が好んで取りあげたモチーフや部分の描写が、画家の内的生命の貴重な指標であるという。ヴァトーについては、いずれも、フランドル文化圏に生まれてルイ大王の最晩年に活動を始めたことであり、ダンスや後ろ姿の描写である。そこから理想美よりも写実を重んじるという構え、「彼方」への憧れ、夢が引き出されて、音楽への接近が、つまり絵画は理解されるのではなく感じとれるもの、魂に語りかけるものだというヴァトーの表現の核心が説かれる。

こうした分析が造成するヴァトー像は、ユイグの犀利な思考力と繊細な感受性の所産だが、それが説得力をもつのは、決してわかりやすいとは言えないが、詩的でありながら論理を踏んだ文章の力に

あることを加えておきたい。

船岡美穂子氏（放送大学）は、ジャン・シメオン・シャルダンの《デッサンの勉強》を取り上げた。これは日本が所蔵する唯一のシャルダンの真筆とされる油彩画である。若い画学生が、当時のフランスを代表する彫刻家ジャン＝バチスト・ピガールの作品を模写する姿が描かれる。フランス美術が、規範としての古代ギリシア・ローマ美術やイタリア美術にとって替わりつつあることの視覚化という、重要な指摘がある。さらに作品の所蔵者が著名な蒐集家ラ・リヴ・ド・ジュリであることから、当時の美術愛好家にはデッサンの素養が不可欠だったことをあらわすものでもあるという。

太田みき氏（学習院大学）はフランソワ・ブーシェの《田園の奏楽》と《田園の気晴らし》の対作品を俎上に載せる。ロココ美術の傑作だが、古典主義美術信奉者からは強く批判された。道徳的教訓的主題からの逸脱や構図の弱さが、かれらには容認できなかったのである。しかしながら、そこにこそこの時代の美術の魅力、および鑑賞形態の新しさがあるという。私的な空間を飾るこれらの作品の心地よい色彩の組み合わせや、均整のとれた形態、とりわけ作品の解釈を見る人の自由に委ねるといふ論は、十分に玩味すべきであろう。

伊藤巳令氏（日本大学）は、美術館が所蔵する《岩の多い海岸の難破船》の作者ジャン＝バチスト・ピルマンの、風景画家とは別の装飾画家としての側面に注目する。貝殻や岩や植物などをモチーフに形づくられた湾曲する非対称の幻想的な図案は、ロココの語源になったともいわれるロカイユ装飾を生成する。フランスを発信源にヨーロッパに広がった装飾様式の展開に、ピルマンとかれの図案の複製版画が果たした役割が、多くの図像とともに紹介された。絵画と彫刻を中心とする美術史に、まさしく切り込む発表といえよう。

矢野陽子氏（駒澤大学）はグロ工房作とされる《第一執政ボナパルト》の肖像を取り上げた。アントワーヌ＝ジャン・グロは1802年から翌年に、ゆかりの都市などに贈るために4点のボナパルトの肖像画の注文を受けた。第一執政はそれに満足して、アングルやデュフォなど7人の画家に、グロの作品に基づいて7都市に送る肖像画を描くように注文した。制作の経緯が丹念に手堅く辿られる。画家たちはボナパルトのポーズや服装、あるいは開口部から除く景觀に、モデルと都市の関りを示したとされる。東京富士美術館と酷似した作品がミラノのリソルジメント博物館にあることが明らかにされ、それはデュフォに注文されプロワに贈られた作品とのことである。東京富士美術館の作者の再考が促される。

最後に、日本18世紀学会事務局長の金沢文緒氏（岩手大学）が美術館や参加者への謝意とともに、発表を振り返りつつ、美術館との今後の協力について期待を述べて閉会となった。

多岐にわたる盛りだくさんの内容で、質疑応答の時間がとれないという恨みが残った。ユイグの資料を基に美術館が創設を検討している研究所で、さらに交流が進むことを願わずにはいられない。



事務局より

幹事会・総会について

『学会ニュース』第105号の刊行以降、幹事会が以下の日程で開催されました。

2025年12月20日（土） 2025年度第3回幹事会

『学会ニュース』のオンライン化について

『学会ニュース』は、第103号からオンライン形式での発行に完全移行し、会員の皆様へのお届け方法は、メールを通じて事務局のGoogle Driveのリンクから各自でダウンロードしていただく形とな

りました。なお、学会ウェブサイト上にはこれまでと同様、個人情報削除した抜粋版を掲載しています。メールを介した送付となっていますので、メールアドレスの登録がお済みでない方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報ください。

会員名簿の公開について

2016年度以降しばらく発行を停止していましたが、会員同士の研究交流の活発化を図るため、2024年度から会員名簿の定期的な提供を再開しました。2026年度の会員名簿の閲覧方法につきましては、2026年5月30日に当学会からお送りしたメールをご確認ください。名簿に掲載する個人情報は最小限にとどめ、①氏名、②所属先、③メールアドレス（公開・非公開は選択可）、④現在の研究課題のみとしています。ご所属等のご変更があった場合は、マイページから速やかな情報の更新をお願いいたします。

『年報』への論文投稿について

大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できます。詳しくは年報または学会ウェブサイト記載の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この『学会ニュース』に投書をしていただくこともできます。事務局までお申込み下さい。

共通論題のテーマ、および書評対象図書

年次大会における共通論題（シンポジウム）のテーマにつきまして、会員の皆様からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事までご一報ください。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

また、『年報』の書評対象図書についても、書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。

『学会ニュース』のエッセー

会員によるエッセーの掲載を増やし、『年報』と並行して『学会ニュース』を会員同士の研究交流の場として活用していく方針となり、第106号には、長年幹事をお務めいただき、事務局長としてもご尽力いただいた小関武史会員、東京富士美術館と当学会の共催シンポジウムを企画していただきました大野芳材会員にご寄稿いただきました。研究紹介、海外滞在記等、テーマは自由で、1200字程度のエッセーを随時受け付けていきます。会員の皆様からの積極的なご寄稿をお待ちしております。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。

寄付のお願い

寄付をご希望の方は事務局までご一報ください。こちらから振込方法についてお知らせいたします。

献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

・杉山卓史『「われ感ず、ゆえにわれ在り」の美学—ドイツ啓蒙主義における「感情」と「感覚」の系譜』（思文閣、2025年11月）

- ・清水和子『メアリ・ウルストンクラフトとフランス革命』（京都大学学術出版会、2025年12月）
- ・橋詰かすみ『ジュネーヴ共和国騒乱とルソー ―焚書から偉人視までの受容史』（勁草書房、2026年2月）
- ・原田哲史『ドイツ社会経済思想史の研究』（ミネルヴァ書房、2026年3月）

新入会員募集

日本18世紀学会では、新規会員を募集しています。入会希望者は学会ウェブサイトの〔入会案内〕からいつでも入会申請が可能であり、幹事会では随時入会承認を行っています。非会員も入会した時点から大会の自由論題発表への応募の権利が生じます。会員の皆様も、ぜひ18世紀研究に関心のある方を当学会にご勧誘ください。

幹事会メンバー（50音順）：飯田賢穂（事務局）、井上櫻子（事務局）、上村剛（事務局）、王寺賢太（事務局、ハラスメント対策委員）、大石和欣（年報編集委員）、大塚雄太（大会実行委員長）、隠岐さや香（国際学会副事務局長、ハラスメント対策委員）、金沢文緒（事務局長）、川村文重（事務局、ハラスメント相談担当委員長）、桑原俊介（年報編集委員、ハラスメント相談担当委員）、菅原百合絵（事務局、ハラスメント相談担当委員）、武田将明（代表幹事、ハラスメント対策委員長）、玉田敦子（国際学会派遣委員）、永見瑞木（年報編集委員長、ハラスメント対策委員）、吉田耕太郎（大会実行委員）

幹事会以外の委員（50音順）：出羽尚（年報編集委員）、佐藤空（ハラスメント相談担当委員）、船岡美穂子（ハラスメント対策委員）、増田都希（年報編集委員）

会計監査（50音順）：貝原伴寛、増田都希

日本18世紀学会ニュース 第106号 2026年5月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 武田将明

事務局 〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-33

岩手大学教育学部美術教育科 金沢文緒研究室 日本18世紀学会事務局

e-mail: jsecs18@gmail.com

<https://jsecs.smoosy.atlas.jp/ja>